

横浜植物会ホームページ http://www011.upp.so-net.ne.jp/yoko_syoku/index.html

日光植物園に帰化したケネバリハコベ

会長 勝山 輝男

2009年の創立100周年記念誌「横浜植物会の歴史」に「ヤンバルハコベとオムナグサ」と題した小論を書きました。当時、ヤンバルハコベとオムナグサの区別がはっきりせず、ネットでも両者が混同して掲載されていたので、両者の区別点と国内分布を調べて書いたものです。神奈川県立生命の星・地球博物館のヤンバルハコベの標本を調べた際に、花柄、葉柄、葉に長毛があり、ヤンバルハコベでもオムナグサでもないものが1点紛れ込んでいました。この標本(KPM-NA0119942)は2000年8月28日に軽井沢植物園で採集されたもので、「軽井沢植物園の花」(軽井沢町教育委員会編, 2005)にも同じ植物がヤンバルハコベの名前で写真が掲載されていました。調べたところ、この植物は南米原産でインド、ヒマラヤ、東南アジア、中国に帰化している *Drymaria villosa* Cham. & Schtdl. と判明しました。帰化しているのか不明でしたが、和名がないと不便なのでケネバリハコベと名づけました。

それから10年がたち、ケネバリハコベの日光植物園への帰化が報告され(清水ほか, 2018)、ネットにも写真が紹介されています(日光植物園, 2018-2019)。はじめは植物園のバックヤードで確認され、その後園内に広がったことから、ヒマラヤや中国産の植物を導入した際に随伴してきたか、あるいは軽井沢植物園からの移管植物とともにいったものと推定されています。最近では植物園の駐車場に繁茂し、近くの国道沿いでも確認されたそうです。植物園では外来種として駆除しているそうですが、簡単には撲滅できないようです。

ヤンバルハコベは南西諸島に分布し、オムナグサも伊豆諸島、小笠原諸島、南西諸島に帰化しています。どちらも亜熱帯～熱帯のもので、本州では一時的に発生してもすぐに消滅してしまうようです。しかし、ケネバリハコベはヒマラヤやチベットに帰化しており、温帯域ではケネバリハコベの方が定着しやすいと思われます。1年草で種子が靴について運ばれると考えられ、今後、関東地方各地への分布拡大が懸念されます。

以下、「横浜植物会の歴史」に書いたケネバリハコベの形態の記述を再録します。

ケネバリハコベ *Drymaria villosa* Cham. & Schtdl., Linnaea 5: 232 (1830).

軟弱な1年草。茎はよく分枝し、匍匐または斜上し、長毛を疎生。葉は対生し、長さ3～8mmの柄があり、腎円形、長さ幅ともに5～15mm、円頭で微凸端、3脈が目立ち、両面や縁に長毛がある。集散花序は数花をつけ、小花柄は長さ2～6mmで長毛が散生し、腺粒はない。花蕾は長楕円形で先は尖る。萼片は卵形～狭卵形、長さ約2mm、幅0.8～1.2mm、鋭頭、膜質で縁は幅広く白色、背面は平滑または基部近くに長毛が散生し、腺粒はない。花弁は萼片よりも短く、白色、2中裂する。種子は1さく果中に10～15個あり、腎円形で直径約0.5mm、表面には角ばった細かい突起がある。

文献

- 軽井沢町教育委員会編, 2005. 軽井沢町植物園の花. ほおずき書籍.
- 勝山輝男, 2009. ヤンバルハコベとオムナグサ. 横浜植物会100年誌 横浜植物会の歴史, pp.341-344. 横浜植物会.
- 日光植物園, 2018-2019 園内の植物, ケネバリハコベ. Online resource. https://www.bg.s.u-tokyo.ac.jp/nikko-old/pr/flower_of_nikko_bg.html (accessed on 2019. 6.27).
- 清水淳子 綾部 充 神山隆之, 2018. 外来植物ケネバリハコベ (*Drymaria villosa* Cham. & Schtdl.) の全国二例目の確認. フロラ栃木, (26): 11-13.



左からヤンバルハコベ、オムナグサ、ケネバリハコベの萼